福岡市埋蔵文化財調査報告書第920集

有田・小田部44

―有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査報告―

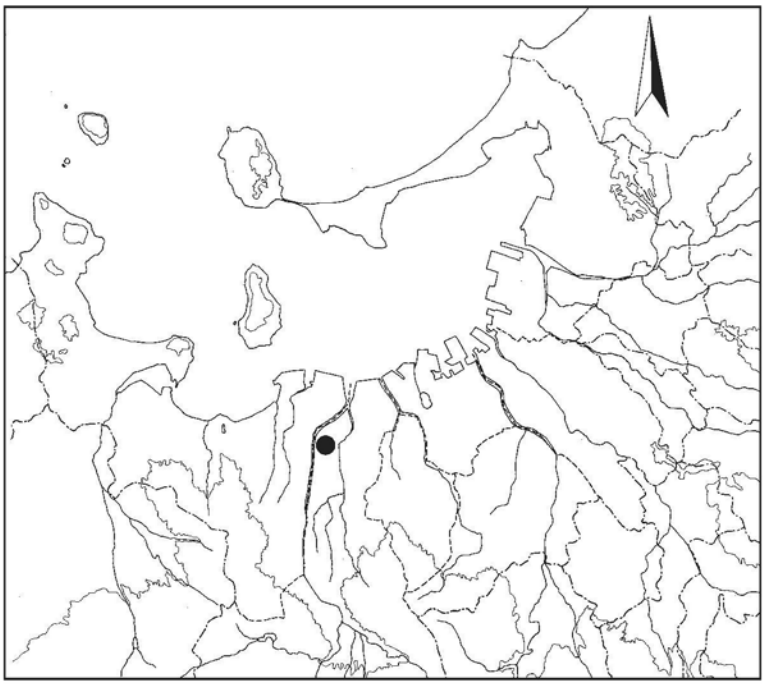
2007

福岡市教育委員会

有田・小田部 44

— 有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第920集



遺跡略号	調査番号
ART-218	0515
ART-219	0519
ART-222	0557
ART-224	0616
ART-225	0638

2007

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。そのため福岡市域には多くの遺跡が残されています。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、個人住宅建築に伴い調査を実施した有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査の内容について報告するものです。今回の調査では古墳時代後期から古代にかけての竪穴住居・掘立柱建物などが発見されました。これらは古代における早良平野の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　植　木　とみ子

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が個人住宅建築に伴い、福岡市早良区有田・小田部地区において国庫補助を得て実施した発掘調査である有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査の報告書である。

2．本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

（第218次調査）

遺跡調査番号	0515		遺 跡 略 号	ＡＲＴ－218	
地　　番	福岡市早良区有田１－12－７		分布地図番号	№082　原	
開 発 面 積	234.49㎡	調査対象面積	87.75㎡	調 査 面 積	95.8㎡
調 査 期 間	平成17年４月27日～５月21日				

（第219次調査）

遺跡調査番号	0519		遺 跡 略 号	ＡＲＴ－219	
地　　番	福岡市早良区小田部５－15－５		分布地図番号	№081　室見	
開 発 面 積	158.62㎡	調査対象面積	45.03㎡	調 査 面 積	32.4㎡
調 査 期 間	平成17年５月24日～６月３日				

（第222次調査）

遺跡調査番号	0557		遺 跡 略 号	ＡＲＴ－222	
地　　番	福岡市早良区有田１－33－15		分布地図番号	№082　原	
開 発 面 積	152.57㎡	調査対象面積	41.57㎡	調 査 面 積	38.1㎡
調 査 期 間	平成17年12月15日～12月26日				

（第224次調査）

遺跡調査番号	0616		遺 跡 略 号	ＡＲＴ－224	
地　　番	福岡市早良区小田部５－47－１・47－２		分布地図番号	№081　室見	
開 発 面 積	152.57㎡	調査対象面積	70.0㎡	調 査 面 積	98.53㎡
調 査 期 間	平成18年５月26日～６月22日				

（第225次調査）

遺跡調査番号	0638		遺 跡 略 号	ＡＲＴ－225	
地　　番	福岡市早良区有田１－33－７		分布地図番号	№082　原	
開 発 面 積	152.57㎡	調査対象面積	40.56㎡	調 査 面 積	34.5㎡
調 査 期 間	平成18年７月27日～８月４日				

3．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之・今井隆博が作成した。

4．本書に掲載した遺物実測図は阿部・今井が作成した。

5．本書に掲載した挿図の製図は阿部・今井がおこなった。

6．本書に掲載した写真は阿部・今井が撮影した。

7．本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より6°40′西偏する。

8．遺構の呼称は掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝をSD、土壙をSK、ピットをSPと略称する。

9．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

10．本書の執筆は阿部・今井が、編集は2者協議の上阿部が行った。

本 文 目 次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　第218次調査の記録 …… 3

第３章　第219次調査の記録 …… 9

第４章　第222次調査の記録 …… 13

第５章　第224次調査の記録 …… 19

第６章　第225次調査の記録 …… 25

挿図目次

Fig. 1　有田遺跡群と周辺の主な遺跡（1/25,000）…… 2
（第218次調査）
Fig. 2　218次調査区位置図（1/1,000）…… 3
Fig. 3　調査区全体図（1/200）…… 4
Fig. 4　調査区東壁土層断面実測図（1/20）…… 5
Fig. 5　SB01・SX02実測図（1/60）…… 6
Fig. 6　218次調査出土須恵器実測図（1/3）…… 7
（第219次調査）
Fig. 7　219次調査区位置図（1/1,000）…… 9
Fig. 8　調査区全体図（1/100）…… 10
Fig. 9　219次調査出土遺物実測図（1/3）…… 10
Fig. 10　調査区北壁土層断面実測図（1/40）…… 11
（第222次調査）
Fig. 11　222次調査区位置図（1/1,000）…… 13
Fig. 12　調査区全体図（1/80）…… 14
Fig. 13　SC01実測図（1/60）…… 15
Fig. 14　222次調査出土遺物実測図（1/3）…… 16
（第224次調査）
Fig. 15　224次調査区位置図（1/1,000）…… 19
Fig. 16　調査区全体図（1/100）…… 20
Fig. 17　SK01・02実測図（1/40）…… 21
Fig. 18　224次調査出土遺物実測図（1/3）…… 22
（第225次調査）
Fig. 19　225次調査区位置図（1/1,000）…… 26
Fig. 20　調査区全体図（1/80）…… 27
Fig. 21　調査区南壁土層断面実測図（1/30）…… 27
Fig. 22　SC01・02・03実測図（1/60）…… 28
Fig. 23　225次調査出土須恵器実測図（1/3）…… 28

図版目次

（第218次調査）
PL. 1 …… 8
1．調査区北側全景（西より）
2．調査区南側全景（西より）
3．SX01北側の土壙（西より）
4．SX01北側の土壙（SK06）土層断面（東より）
5．SK20土層断面（西より）
6．SP05須恵器出土状況（西より）
（第219次調査）
PL. 1 …… 12
1．1区全景（西より）
2．2区全景（西より）
3．2区北壁土層（南より）
（第222次調査）
PL. 1 …… 17
1．調査区全景（北より）
2．SC01床面検出状況（東より）
PL. 2 …… 18
1．SC01竈土層断面（北より）
2．SC01主柱穴内土師器出土状況
（第224次調査）
PL. 1 …… 23
1．調査区南側全景（南より）
2．調査区北側全景（南より）
PL. 2 …… 24
1．SK01完掘状況（東より）
2．SK02完掘状況（東より）
（第225次調査）
PL. 1 …… 29
1．作業状況（西より）
2．調査区全景（北より）
3．西側拡張区全景（西より）
PL. 2 …… 30
1．SC01（西より）
2．SC02（東より）
3．SC03（東より）

第１章　位置と環境

１．地理的環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開析された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。その中央部には南から北にやつで状に尾根を広げる独立丘陵が存在する。

有田遺跡群はこの丘陵上に形成された遺跡である。

２．歴史的環境

有田遺跡群は、現在の地番では有田・小田部地区から南庄を含む地域に位置する周知の埋蔵文化財包蔵地である。有田・小田部地区は昭和40年代に区画整理事業が行われ、旧状を窺うことは困難であるが、旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が出土する複合遺跡である。

旧石器時代遺物は第４次・第６次調査など台地の最高所周辺で出土しているが、明瞭な文化層を検出できたのは第3次調査地点のみである。

縄文時代の遺構で顕著なものは中期から後期前半の貯蔵穴群である。第5次・115次調査地点を中心に検出され、環状の配置となることがわかっている。台地北東部では中期から弥生早期にかけての遺物を含む自然流路が検出されている。

弥生時代には台地の各尾根上に遺構・遺物が分布するようになる。台地の最高所を取り囲むように前期のＶ字溝が巡る状況が検出され、長径300m・短径200mを測る環濠とされる。台地南端部では高等学校敷地内で金海式甕棺が出土し、銅かが出土している。金海～立岩式期の甕棺墓群は台地中央部の尾根上にまで分布する。中期までの竪穴住居は台地各所で検出されるが、後期にはいると遺構数は概ね減少をたどる。

古墳時代には台地の各尾根上に遺構・遺物が分布する。とりわけ後期には竪穴住居址が台地のほぼ全域で検出されるようになる。台地の北部では墳墓が多く築造され、最北端に位置する尾根上に古墳時代前期～中期頃の方形周溝墓・円形周溝墓が10基以上検出される。この尾根の周囲には当該期の竪穴住居はほとんど見られず、台地の最北端に位置する尾根が古墳時代の墓域として利用されていたと推測される。３本の柱で１単位をなす柱列で区画された総柱の掘立柱建物群が複数の地点で検出されており、「ミヤケ」関連の遺構の可能性を指摘されている。

古代には第85次調査地点で官衙建物群が検出され、早良郡衙正殿と推定されている。その北部には平行して東西に走る２条の溝が検出され、古代西海道の側溝との見方もある。また８世紀代とされる炉跡が検出されており、製鉄に関連するものと推測される。

中世には台地の南半に掘立柱建物群が検出される。台地の最高所周辺に大規模な溝状遺構が見られ、大友氏被官小田部氏の里城「小田辺城」と推定されている。一説には現在の西福岡高等学校敷地がその故地といわれる。『筑前国続風土記拾遺』には小田辺城とは別に「堀の内城」なる城名がみられ、小田部氏入城前に別の人物が小田部周辺に城または居館を築いていたようである。あるいは台地最高所周辺の溝状遺構群を整理・縮小する形で小田部氏が「小田辺城」を築いたものか。

1．有田遺跡群　2．元寇防塁　3．藤崎遺跡　4．西新町遺跡　5．五島山古墳群　6．下山門乙女田遺跡
7．拾六町平田遺跡　8．福重稲木遺跡　9．橋本一丁田遺跡　10．橋本榎田遺跡　11．戸切遺跡群　12．太田遺跡
13．吉武遺跡群　14．原遺跡群　15．原東遺跡群　16．飯倉遺跡群　17．次郎丸高石遺跡　18．免遺跡群
19．田村遺跡　20．野芥遺跡群　21．クエゾノ遺跡

Fig. 1　有田遺跡群と周辺の主な遺跡（1/25,000）

第２章　第218次調査の記録

１．調査に至る経過

2005（平成17）年３月８日付で野田祐之氏より本市教育委員会埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第１課。以下、埋文課）宛に早良区有田１丁目12－７における個人専用住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれていることを確認し、周辺の調査成果から申請地内に埋蔵文化財が存在している可能性は高いと考えられた。この成果を元に両者で協議を行ったところ、建築工事によって遺構の破壊を免れないため、建物部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、平成17年４月27日から発掘調査、翌平成18年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

２．調査組織

調査委託：串崎脩

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第２課）

Fig. 2　218次調査区位置図（1/1,000）

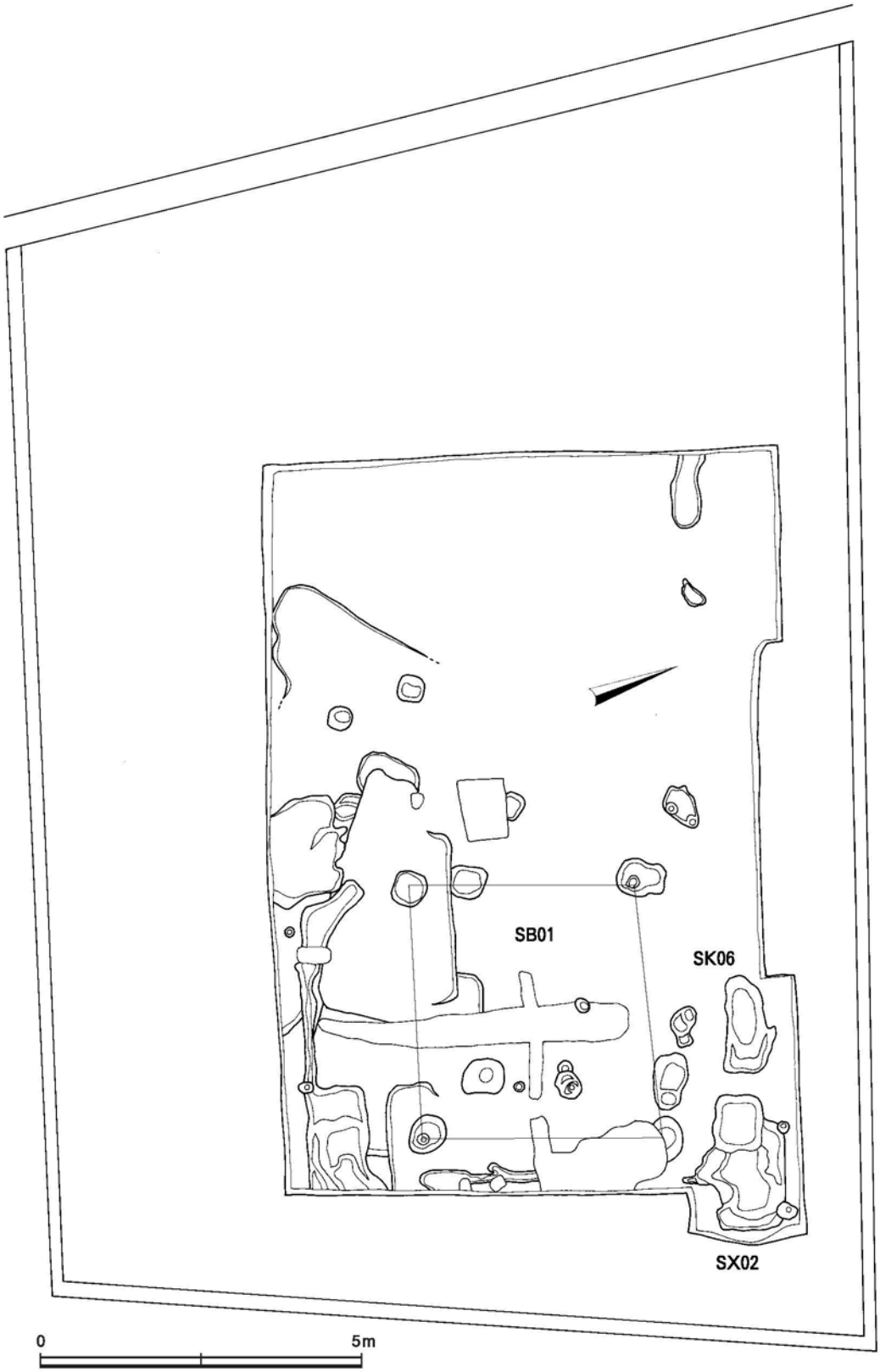


Fig. 3　調査区全体図（1/100）

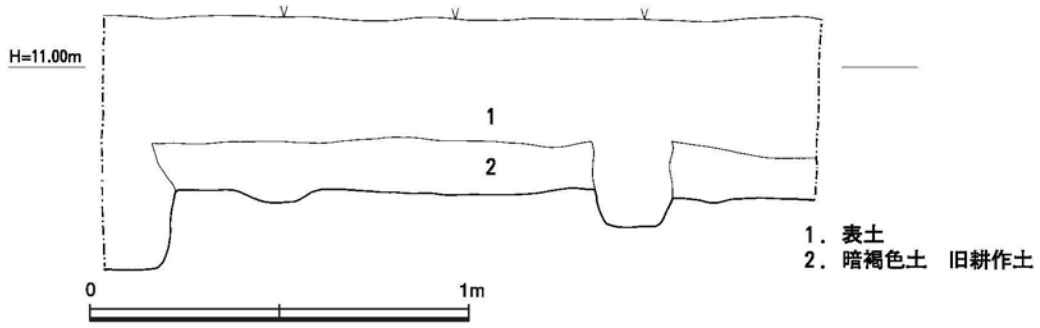


Fig. 4　調査区東壁土層断面実測図（1/20）

調査総括：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第２課）課長　山口譲治（前任）　　力武卓治（現任）
同課調査第１係長　田中壽夫（前任）　　池崎譲二（現任）
調査庶務：文化財整備課（現・文化財管理課）　後藤泰子
事前審査：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第１課）事前審査係長　濱石哲也
同係主任文化財主事　吉留秀敏
同係文化財主事　本田浩二郎（前任）　　松浦一之介（前任）　　上角智希（現任）
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係（現・埋蔵文化財第２課調査第１係）　阿部泰之
調査作業：真田弘二　緒方信子　廣瀬公則　廣瀬博子　井上正通　保利順二　野田順二
土橋一則　吉田哲夫
整理作業：窪田慧　黨早苗

３．調査概要

今回報告する第218次調査地点は有田遺跡郡の中央部に位置し、弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が検出された。遺構は現地表面直下、黄褐色ローム質土上にて検出した。調査区西部は削平のためか遺構はほとんど検出されず、遺構は調査区東部に集中する。

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物1・布掘りの下部である可能性を有する土壙群１・他ピットである。このほか浅い落ち込みを複数検出し、当初竪穴住居とも考えたが、主柱穴・炉跡等住居としての要件を満たす遺構が検出されず、住居とは認定しなかった。遺物は須恵器・土師器・弥生土器がコンテナケース２箱出土した。器形を判別しうる破片はごく少ない。表土剥ぎ時に須恵器器台片が１点出土した。

４．遺構と遺物

①　掘立柱建物（SB）

SB01（Fig. 5）　調査区東部で検出した。１間×１間の建物である。竪穴住居の主柱穴の可能性も残されるが、遺構の周囲には住居址関連の遺構は検出されなかったので、ここでは暫定的に掘立柱建物とする。柱穴は径0.6～0.7m前後を測る不整円形～楕円形を呈し、北東の柱穴を除き柱痕跡を検出できた。柱痕跡の間隔は中心同士を結んだ線で東西3.9m・南北3.5mを測る。柱穴の埋土は指頭大のロームをブロック状に含む暗褐色土である。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土したが、器形の判別しうる個体は少ない。

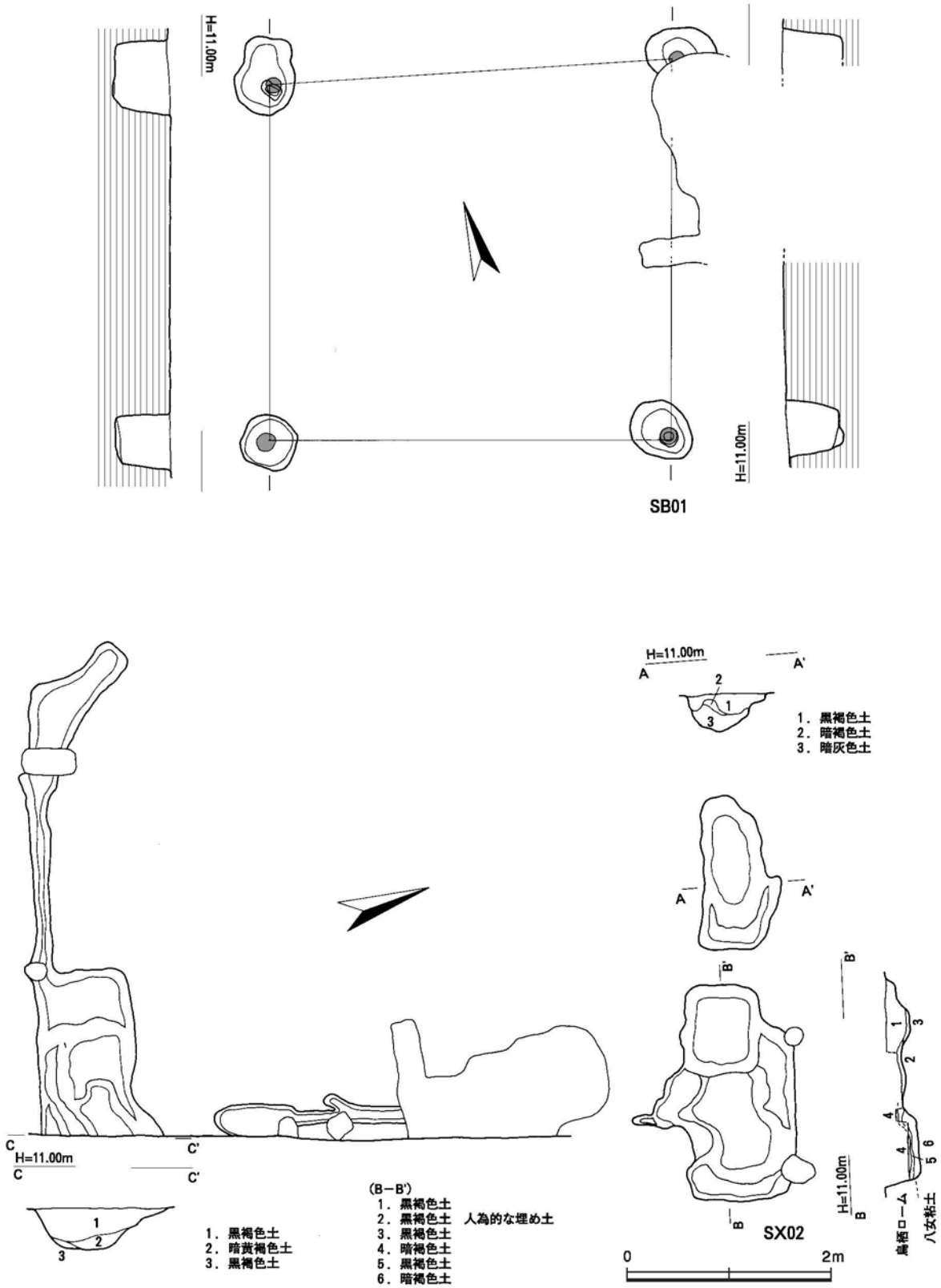


Fig. 5　SB01・SX02実測図（1/60）

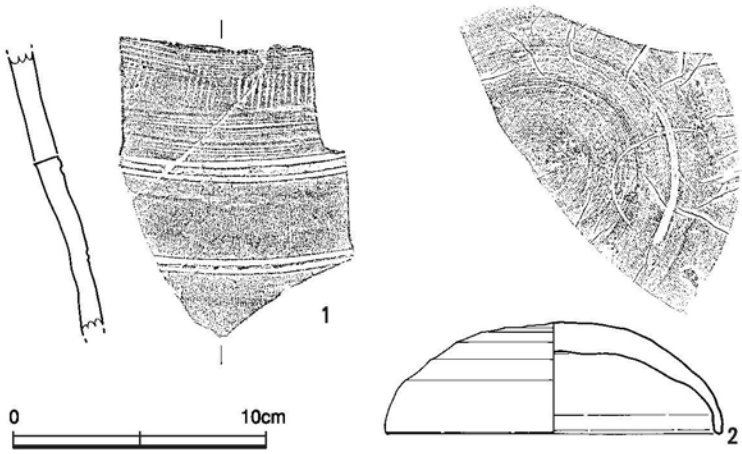


Fig. 6　218次調査出土須恵器実測図（1/3）

② 性格不明の遺構（SX）

SX02（Fig. 5）　調査区東部で検出した。調査区の南北に分かれて南側に土壙状の遺構が２基・北側に土壙状の遺構に溝が付属した遺構が１基、ほぼ平行に並ぶ。調査区東端付近で南側の土壙から派生したと推測される溝が土壙主軸とほぼ直交して南に延びる。土壙と溝は現場では切り合いを認め得なかったので、時期差はない、同一の遺構の一部と推測される。南側の土壙には底面に方形に深くなる部分が認められる。埋土は細かいロームのブロックを含む黒褐色土を人為的に埋めたもので、いずれも近似している。土壙と溝を分離して考えるのではなく、布掘りの掘立柱建物の下部とし一連の遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は、弥生土器・土師器の小片が出土した。

③ その他の遺物（Fig. 6）

遺構からはその時期や器形の判別しうる遺物はほとんど出土していない。ここでは器形のわかる遺物と表土剥ぎ時に出土した器台を報告する。

いずれも須恵器である。１は、器台である。脚部の小片で、外面に２条を１単位とする凹線が見られる。２は、SP05出土の蓋である。1/3個体程度残存する破片で、口径13.0cm・器高4.4cmに復元できる。天井部外面にヘラ記号が観察される。いずれも胎土は精良で焼成は良好である。

５．小結

今回の調査では、掘立柱建物１棟・性格不明の遺構１・他ピット等を検出した。掘立柱建物は１間×１間で竪穴住居の主柱穴の可能性も残される。本文中では性格不明の遺構としたが、これは南側に土壙状の遺構が２基・北側に土壙状の遺構に溝が付属した遺構が１基、ほぼ平行に並ぶ。調査区東端付近で南側の土壙から派生したと推測される溝が土壙主軸とほぼ直交して南に延び、全体にコの字状を呈する。本調査区の東50mに位置する第69次調査において３×４間の総柱の掘立柱建物が検出されているが、今回の調査で検出した溝と土壙はこれと類似した方位を持つ。これらの溝と土壙は掘立柱建物の布堀りの下部である可能性が考えられるが、全体に遺物が非常に少なく遺構の残りも悪いため現場では確認できなかった。69次調査区では整地層が検出されており、掘立柱建物はこの整地層を切っていると推測されている。整地層に含まれる遺物から69次調査検出の総柱の掘立柱建物の時期は８世紀後半以降と考えられているが、218次調査の結果から当該期の掘立柱建物群が調査地周辺に広がっているとも推測される。

PL. 1

1．調査区北側全景（西より）

2．調査区南側全景（西より）

3．SX01北側の土壙（西より）

4．SX01北側の土壙（SK06）土層断面（東より）

5．SK20土層断面（西より）

6．SP05須恵器出土状況（西より）

第３章　第219次調査の記録

１．調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第１課、以下、埋文課）は、2005（平成17）年２月９日付で林俊彦氏から早良区小田部５丁目15－５における個人専用住宅新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を受けた。埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群の推定範囲に含まれていることを確認し、工事予定地で平成17年５月13日に試掘調査を実施した。この試掘調査において遺構・遺物の存在が確認されたため、この成果を元に両者で協議を行ったところ、工事によって遺構の破壊を免れないため、地山切り下げ部分で切り下げ深さである現地表面から－1.3mまでの部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、平成17年５月24日から発掘調査、翌平成18年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

２．調査体制

調査委託：林俊彦

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）

調査総括：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）課長　山口譲治（前任）　　力武卓治（現任）
同課調査第1係長　田中壽夫（前任）　　池崎譲二（現任）

調査庶務：文化財整備課（現・文化財管理課）　後藤泰子

事前審査：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課）事前審査係長　濱石哲也
同係主任文化財主事　吉留秀敏

Fig. 7　219次調査区位置図（1/1,000）

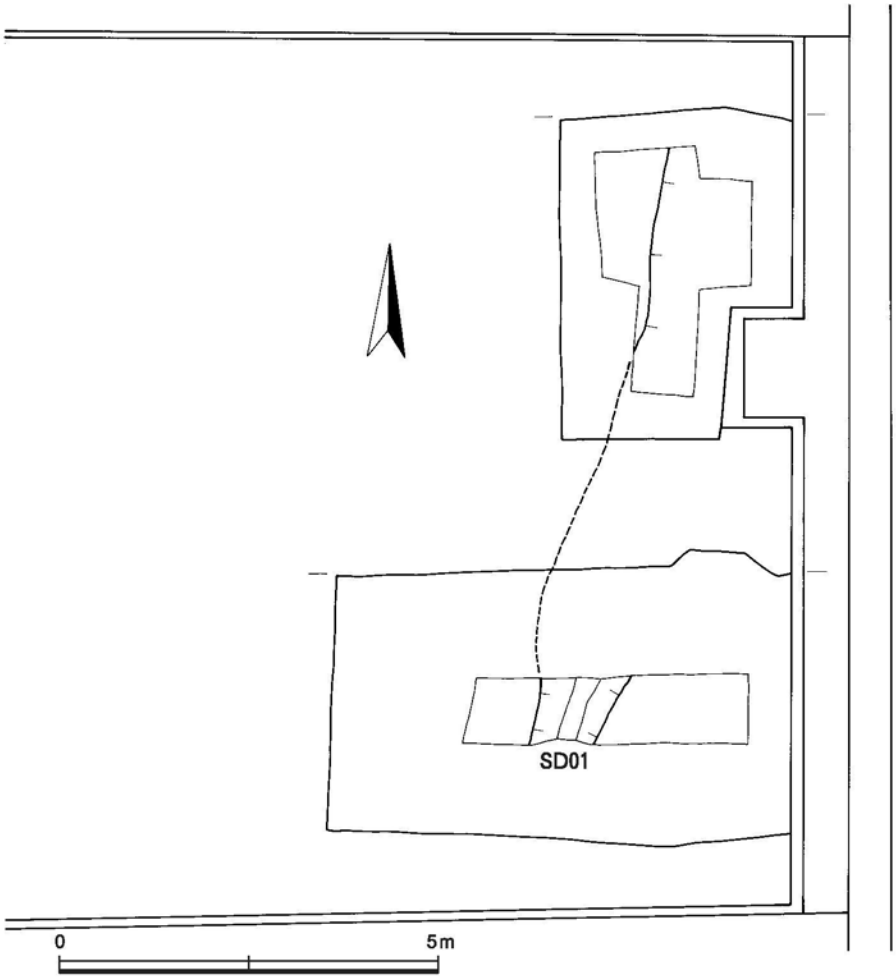


Fig. 8　調査区全体図（1/100）

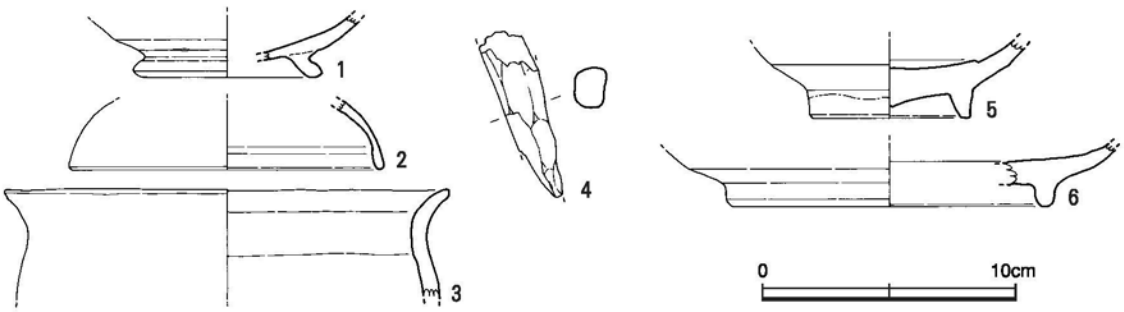


Fig. 9　219次調査出土遺物実測図（1/3）

同係文化財主事　本田浩二郎（前任）　松浦一之介（前任）　上角智希（現任）

調査担当：埋蔵文化財課調査第２係（現・埋蔵文化財第２課調査第１係）　阿部泰之

３．調査概要

第219次調査地点は、ヤツデ状に広がる台地の支脈の北端付近に位置する。地山切り下げ部分が調査対象であったため調査区が南北２箇所に分かれることとなった。この調査では弥生時代から中世にかけての遺物が含まれる遺物包含層、戦後掘削された水路と推測される溝1条を検出した。包含層は現地表面から－0.5mで検出され、暗褐色シルト質土である。これらの他には顕著な遺構は検出されなかった。遺物は、陶磁器・須恵器・土師器・弥生土器・黒曜石片が主に遺物包含層から出土した。

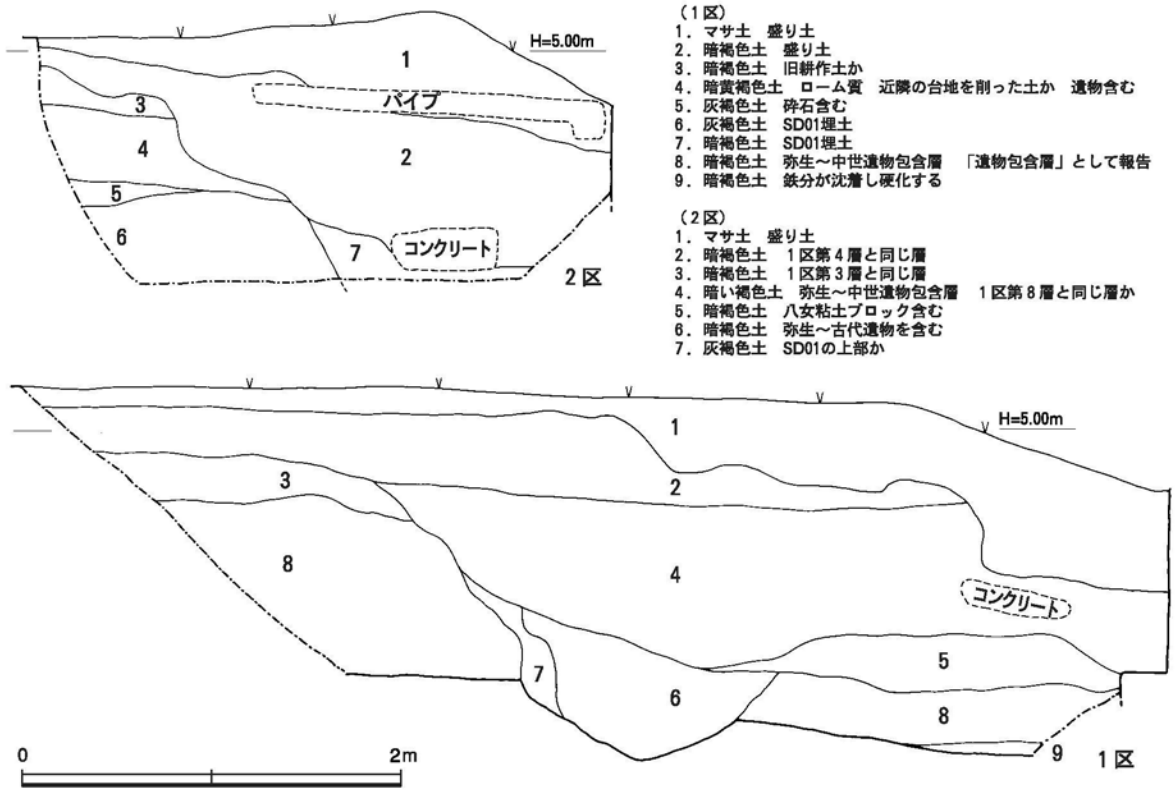


Fig. 10　調査区北壁土層断面実測図（1/40）

調査区の層序をFig.10をもとに説明する。地表面下0.5mで検出される遺物包含層（第8層）は水路SD01に大きく削られるが、西から東に向かって緩く傾斜する状況が推測される。均質な層で基盤層の灰白色粘質土との境界は漸移的で、自然堆積と推測される。包含層と基盤層との境界には鉄分が沈着し硬化するが、人為的なものではない。

4．調査の記録

①　溝（SD）

SD01（Fig. 8）　調査区中央部にて検出した。南北方向に調査区を貫流する溝で、遺物包含層を切る。埋土は灰褐色土で均質である。廃絶時に一気に埋めた後、盛り土を行って宅地化した状況を示すものか。遺物はFig. 9の4に示す瓦質土器鍋の脚部の他、鉄滓・弥生土器・須恵器・瓦質土器鉢・土師皿が出土したが、ビニール・プラスチック片も出土し、現代の水路と推測される。

②　遺物包含層

調査区全域で検出した。しかし水路SD01構築時に大きく削られ、遺存状況はよくない。南側調査区（1区）では均質な堆積であるが、北側（2区）ではわずかな質の差が見られ、堆積期間が長期にわたった可能性もある。いずれにせよ人為的な堆積ではない。遺物はFig. 9に須恵器坏(1)・蓋(2)、土師器甕(3)、白磁碗(5)、龍泉窯系青磁(6)を図示している。その他弥生土器、瓦質土器擂鉢、褐釉陶器が出土している。

5．小結

219次調査では、弥生時代から中世にかけての遺物が含まれる遺物包含層を検出した。包含層出土遺物の時期は概ね15世紀代を下限とする。第90次調査で台地を南北に走る小規模な谷の落ち際が、第50次調査でこの谷と推測される谷頭が検出されているが、今回の調査で検出された遺物包含層は、この谷の堆積層と思われる。今回の調査は有田遺跡群が位置する台地の北端の状況を示す1例となろう。

PL. 1

1．1区全景（西から）

2．2区全景（西から）

3．2区北壁土層（南より）

第４章　第222次調査の記録

１．調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第１課、以下、埋文課）は、2005（平成17）年10月24日付で岡田浩一郎氏から早良区有田1丁目33番７における個人専用住宅新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を受けた。埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群の推定範囲に含まれていることを確認し、工事予定地で平成17年11月15日に試掘調査を実施した。この試掘調査において遺構・遺物の存在が確認されたため、この成果を元に両者で協議を行ったところ、工事によって遺構の破壊を免れないため、地山切り下げが必要な駐車場およびエントランス部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、平成17年12月15日から発掘調査、翌平成18年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

２．調査体制

調査委託：富永孝治

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第２課）

調査総括：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第２課）課長　山口譲治（前任）　力武卓治（現任）
同課調査第１係長　田中壽夫（前任）　池崎譲二（現任）

調査庶務：文化財整備課（現・文化財管理課）　後藤泰子

事前審査：埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第１課）事前審査係長　濱石哲也
同係主任文化財主事　吉留秀敏

Fig. 11　調査区位置図（1/1,000）

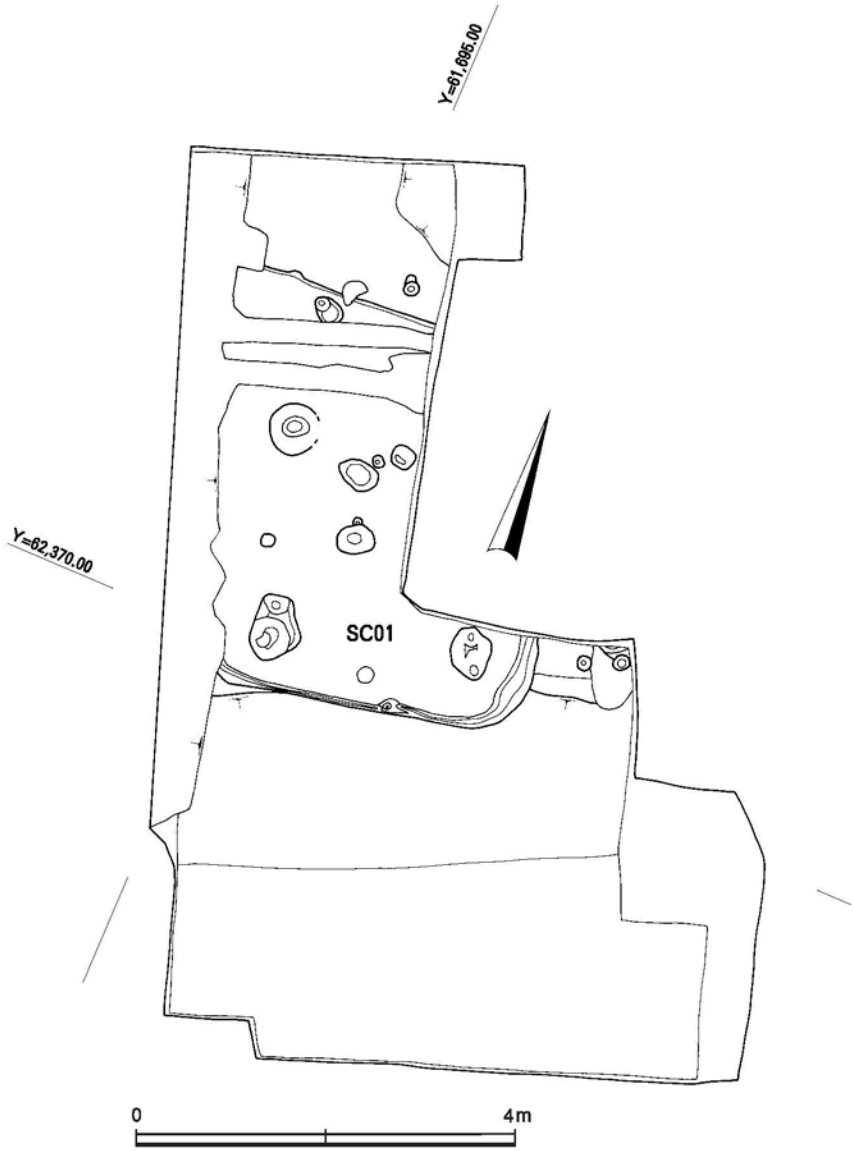


Fig. 12　調査区全体図（1/80）

同係文化財主事　松浦一之介（前任）　上角智希（現任）

調査担当：埋蔵文化財第２課調査第１係　阿部泰之

調査作業：徳永洋二郎　辻節子　梅野真澄　三谷朗子　田原忠昭　神原堅　安河内史郎

整理作業：窪田慧　黨早苗

３．調査概要

第222次調査区は有田遺跡群が位置する洪積台地の中央部、谷の解析で鞍部状に細くなる部分に位置する。調査地では表土直下でロームが露出し、遺構はその上面で検出される。

調査区は大略L字状を呈する。南側約1/3は既存建物によって0.9m以上の削平を受け、遺構は検出できなかった。今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居1・土壙状の掘り込み1・ピットである。竪穴

住居は方形プランで主柱穴は４本、北壁近くに竈を有する。土壙状の掘り込みは竪穴住居を切るが、大半が調査区外に伸びるため性格等は不明である。埋土から推定して近世以降の所産と推測される。ピットは小規模不定形な物で柱痕跡を有さず、柱穴ではないと推測される。

４．遺構と遺物

①　竪穴住居（SC）

主な遺構はこの竪穴住居１軒である。

SC01（Fig.13）　調査区中央部にて検出した。西側周壁を道路開設に削られ、北東側の1/4は隅角部を含め調査区外となる。東側の一部を土壙状の落ちに切られる。平面プランは隅丸方形である。南壁と北壁は平行ではなく、正確にはやや西に開く台形状のプランとなろうか。東西3.4m以上、南北4.1～4.4mを測る。周壁は残りのよい箇所で20cm、浅いところで10cm程度で、区画整理時の削平の結果、総じて残りは悪い。

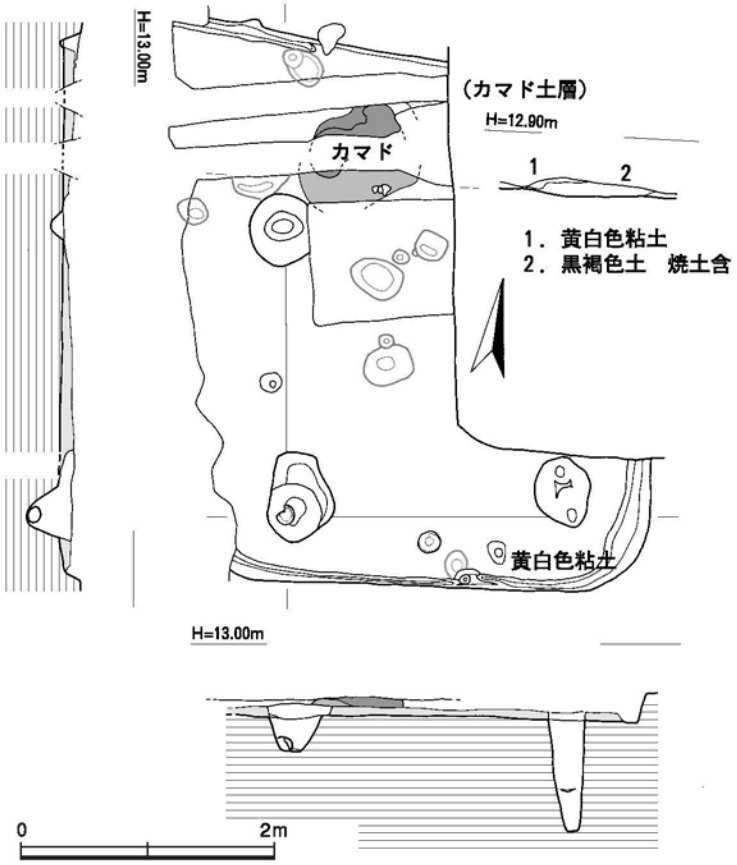


Fig. 13　SC01実測図（1/60）

主柱穴は他の柱穴の配列から４本柱と推測される。北東隅の柱穴は調査区外となるため検出できなかった。廃絶時に根本から柱を抜去したためかいずれの柱穴からも柱痕跡は検出できなかった。主柱穴のプランは貼り床を除去してからでないと完全に検出できなかったことから、主柱を立てた後床面を構築したものと推測される。柱間は中心同士で2.2～2.3mを測る。柱穴は不整円形で長径60～70cmとほぼ一定であるが、深さは南東隅の柱穴が90cmと飛び抜けて深く、北西隅の柱穴は15cmと浅い。その他の柱穴は深さ約50cmである。南西隅の柱穴から土師器坏が1点出土した。廃絶時の祭祀か。

壁溝は、周壁に沿って検出された。すべての箇所で貼り床を切って構築されている。幅10～15cm、深さ5～10cmで、南東隅部のみ幅30cmと広くなる。南壁ほぼ中央にピット状に深くなる部分を検出した。なお北壁の東側には壁溝を検出できなかったが、後述する竈を北壁近くに構築したためと推測される。

貼り床は検出部についていえば底面全体に施される。ロームのブロックが多く混じった黒褐色土を用い、厚さ5～10cmを測る。南壁近くの床面直上から土師器高坏の坏部が1点出土した。住居廃絶時の祭祀か。掘り方の底面はほぼフラットである。

北壁中央付近で竈を検出した。遺存状況は悪く、被熱し焼土をブロック状に含む黄白色粘土が不整楕円形状に分布する状況で竈の原形はとどめていない。土層断面の観察から貼り床を切って構築されていたと推測される。北壁近くで黄白色粘土の堆積を検出した。貼り床の直上に置かれた状況で、対置粘土と推測される。

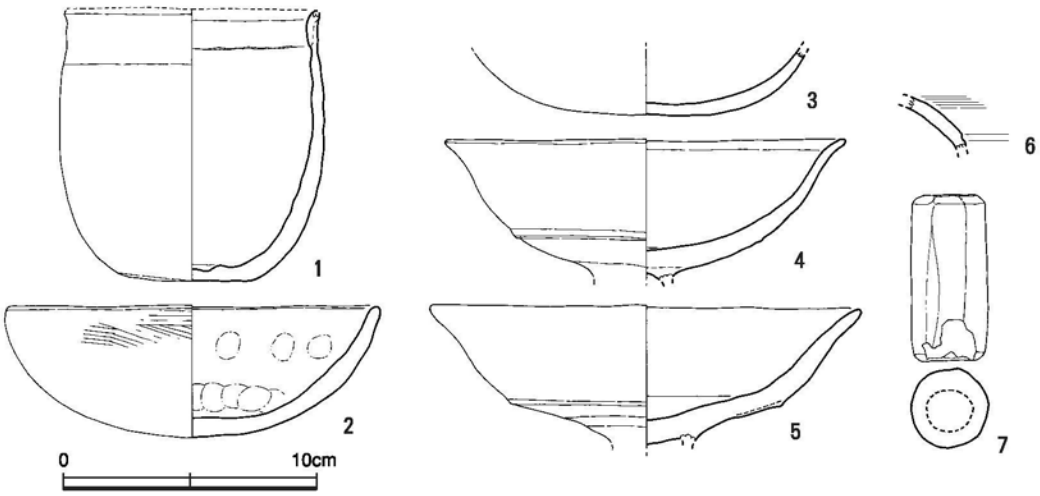


Fig. 14　222次調査出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.14）　床面直上から遺存状態の良好な個体が出土した。1～5は土師器である。1は、小形の鉢である。蛸壺か。1/4個体残存する個体で口径9.8cm、器高10.7cm以上に復元される。口縁部内面に粘土帯を貼り付けた接合痕が観察される。2・3は、坏である。4/5程度残存する個体で、口径14.5cm、器高5.2cmを測る。内面に押さえ、外面に横方向のハケメが観察される。4・5は高坏の坏部である。4は床面直上から出土した。坏部がほぼ完存する個体で、体部外面やや脚部よりに断面3角形の突帯を1条巡らす。磨滅のため調整は不明である。5は主柱穴内から出土した。坏部が2/3残存する個体で、口径16.8cm、残存高5.5cmに復元される。体部外面下半に粘土を貼り付け、稜を形成している。6は須恵器蓋の小片である。主柱穴P－1から出土した。外面に凹線が見られ、天井部にカキメが施される。7は、土錘である。土師質でほぼ完形である。器長6.6cm、径3.0cm、重量52ｇを測る。いずれの遺物も磨滅が著しく調整等は不明瞭である。

②　その他の遺物（Fig.14）

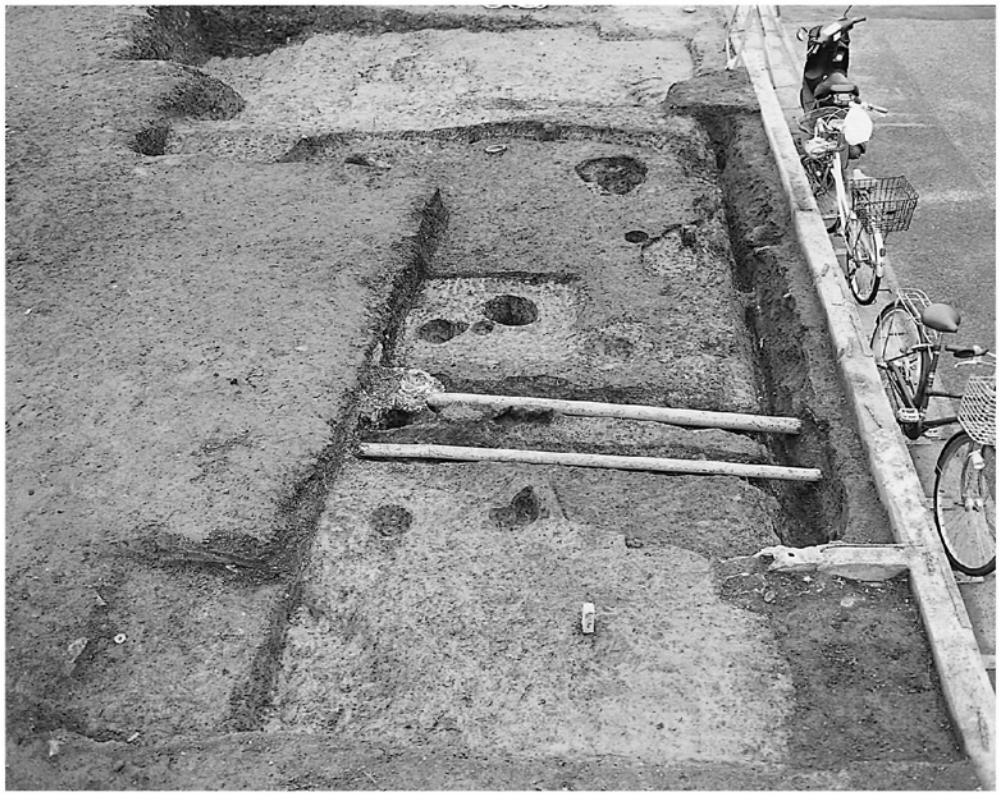
器形のわかる遺物のみ実測した。3は土師器坏である。遺構検出面出土。底部のみの小片で、残存高2.6cmを測る。磨滅が著しく調整等は不明瞭である。

5．小結

今回の調査で検出した主な遺構は、竪穴住居1・ピットである。竪穴住居は方形プランで主柱穴は4本、北壁近くに竈を有する。今回の調査で検出した住居址は、遺存状況は良好とはいえないが廃絶時に土師器、それも坏部を打ち欠いた高坏の坏部を用いた祭祀の状況がみられたほか、竪穴住居の構築過程が推測できる状態にあった。概ね以下のような構築過程をたどったと推測される。

まず、住居の堀方を掘削する。このとき主柱穴も同時に設けるのかもしれない。次に主柱を据える。このとき梁を渡して一気に屋根まで掛けた可能性もあるが、床を貼ることを考えれば屋根掛けより先に床を貼ったとも推測される。床を貼った後壁溝・竈を構築し、屋根をかければ完成である。

上記の過程をみると、構築の際に降雨があると完成後の住居の快適度・強度に大きな影響があることがわかる。竪穴住居はいつでも構築可能なものではなく、降雨が少なく湿度が低い時期が意図して選ばれたと思われる。また構築に要する柱・屋根・竈等の資材調達まで考慮すれば竪穴住居の構築は一人でできるとは考えられない。おそらく農閑期にある単位の集団で複数棟同時並行で作業を行ったものと推測される。このことについてはさらに類例を収集し、より詳細な検討を加えたい。



1　調査区全景（北より）

2　SC01床面検出状況（東より）

PL. 2

1　SC01竈土層断面（北より）

2　SC01主柱穴内土師器出土状況（東より）

第５章　第224次調査の記録

１．調査に至る経過

平成18年２月20日、青野和彦氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋文課）に対して、福岡市早良区小田部５丁目47－１及び47－２における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれていることから、平成18年３月14日に試掘調査を実施した。その結果、現地表下約10～30cmで遺構面を確認し、ピットを検出した。５月16日、野口守氏より同地に事前審査申請書が提出され、以前の試掘結果に基づいて申請者と埋文課は協議を行い、記録保存のため緊急発掘調査を実施することになった。その後委託契約を締結し、平成18年５月26日から同年６月22日まで発掘調査を実施した。遺構・遺物の内容から平成18年度中に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

２．調査の組織

調査委託：野口守
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
調査総括：埋蔵文化財第２課　課長　力武卓治
　　同課調査第１係長　池崎譲二
調査庶務：文化財管理課　　後藤泰子
事前審査：埋蔵文化財第１課事前審査係　松浦一之介（前任）　上角智希（現任）
調査担当：埋蔵文化財第２課調査第１係　今井隆博
調査作業：有江笑子　上野道郎　海津宏子　金子由利子　柴田勝子　柴田春代

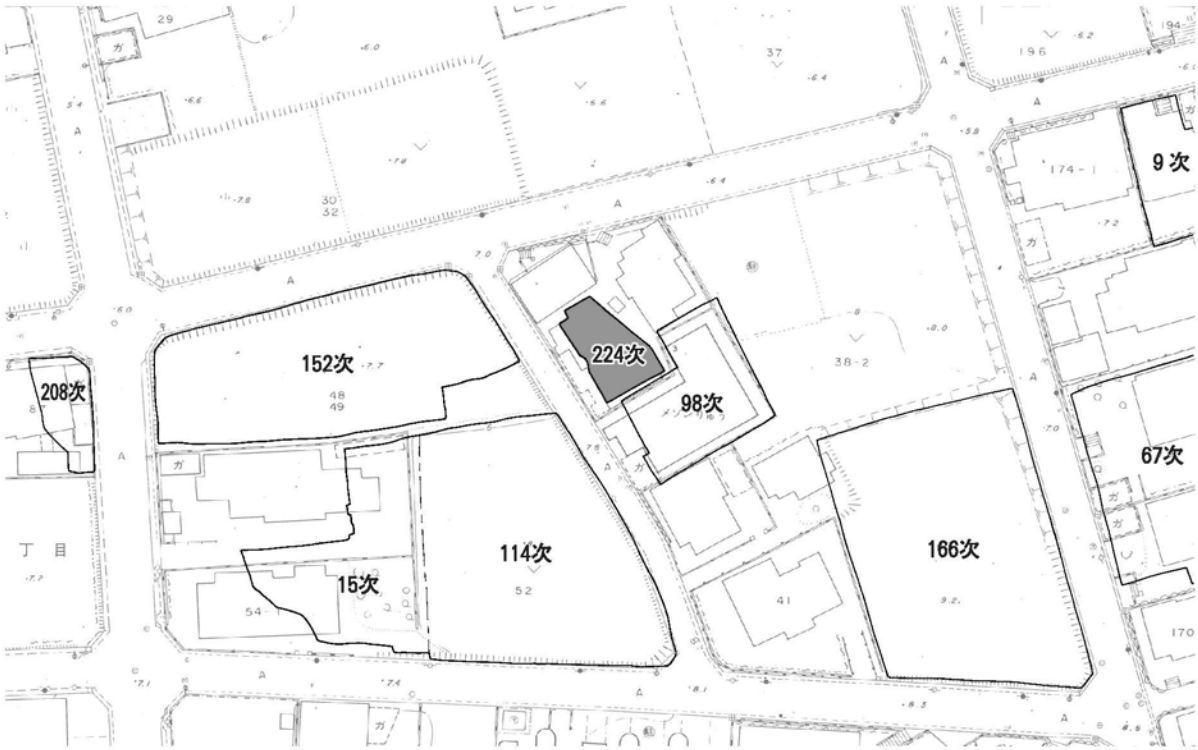


Fig. 15　224次調査区位置図（１/1000）

3．調査の概要

有田遺跡群は早良平野の北側、室見川右岸にある独立中位段丘上にある。この段丘は北側が八手状に広がる形状をしており、今回の調査地点はこの八手状の台地の西から２番目の台地中央部にあたる。現況は宅地であった。本調査地点は南側に第98次地点が隣接しており、西側には道路を挟んで第15・114・152次地点が位置している。第98次地点では遺構がほとんど見られなかったが、第15・114・152次地点では弥生時代～古墳時代の竪穴住居址、掘立柱建物、土壙、ピットなどが多数検出されている。

今回の調査地点では、表土から10～50cm下の明褐色ローム上面で遺構を検出した。廃土処理の都合上、調査区を南北に分けて南側から着手した。調査区内は南西隅から北側と東側に緩やかに傾斜し、遺構面の標高は南側で約8.4m、北・東側で8.2m前後である。Fig.16は調査区の遺構配置図である。第15・114・152次地点の内容から本調査地点でも弥生時代～古墳時代の集落の検出が期待されたが、調査範囲内は近現代の撹乱が多いうえに削平が著しく、検出した遺構は土壙２基とピット約30基であった。遺構は南側で多く確認された。出土遺物は非常に少なく、土師器・須恵器の小片と黒曜石片のみでコンテナ１箱分に満たない。遺物は小片ばかりで時期決定が困難であるが、概ね古代と思われる。

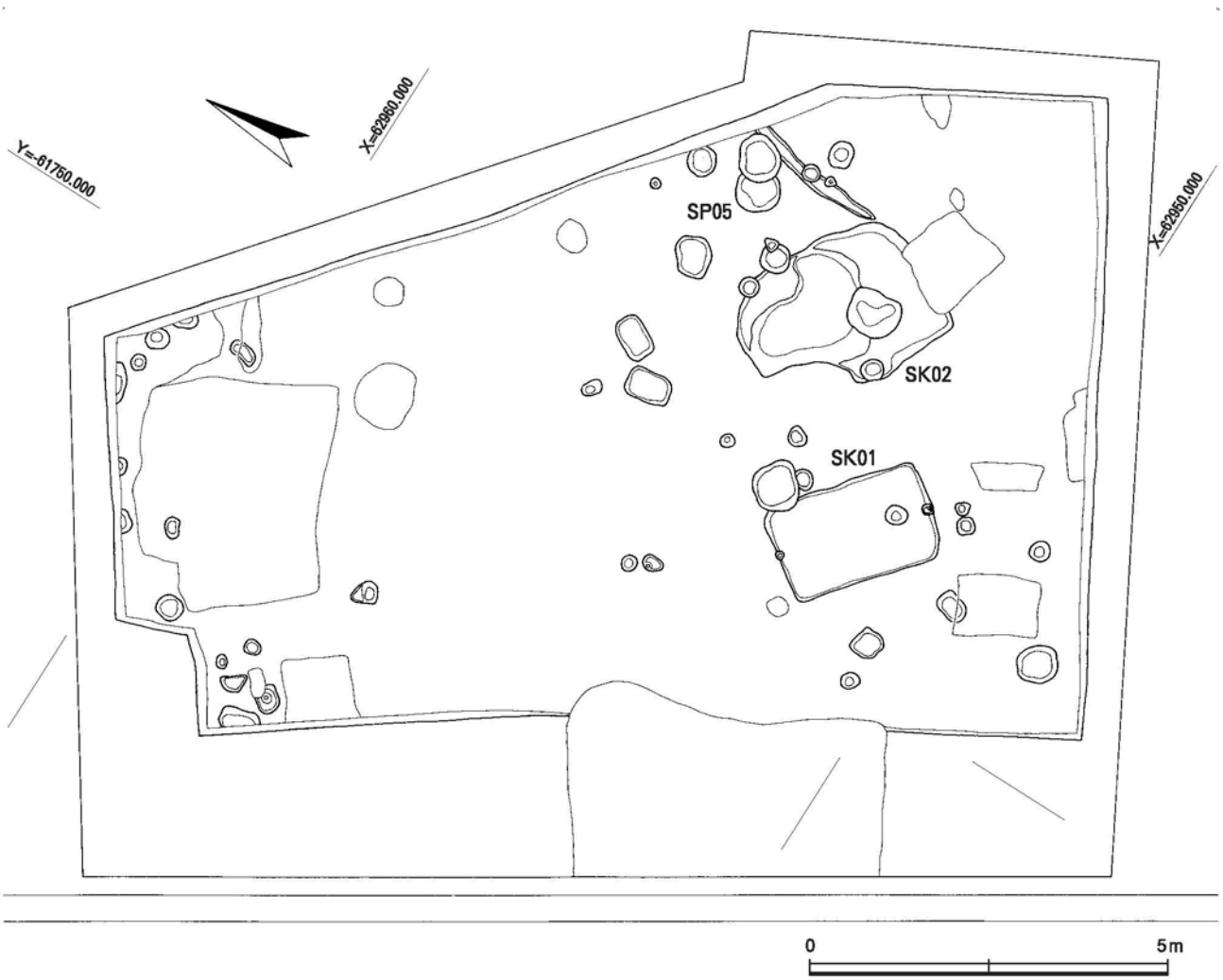


Fig. 16　調査区全体図（１/100）

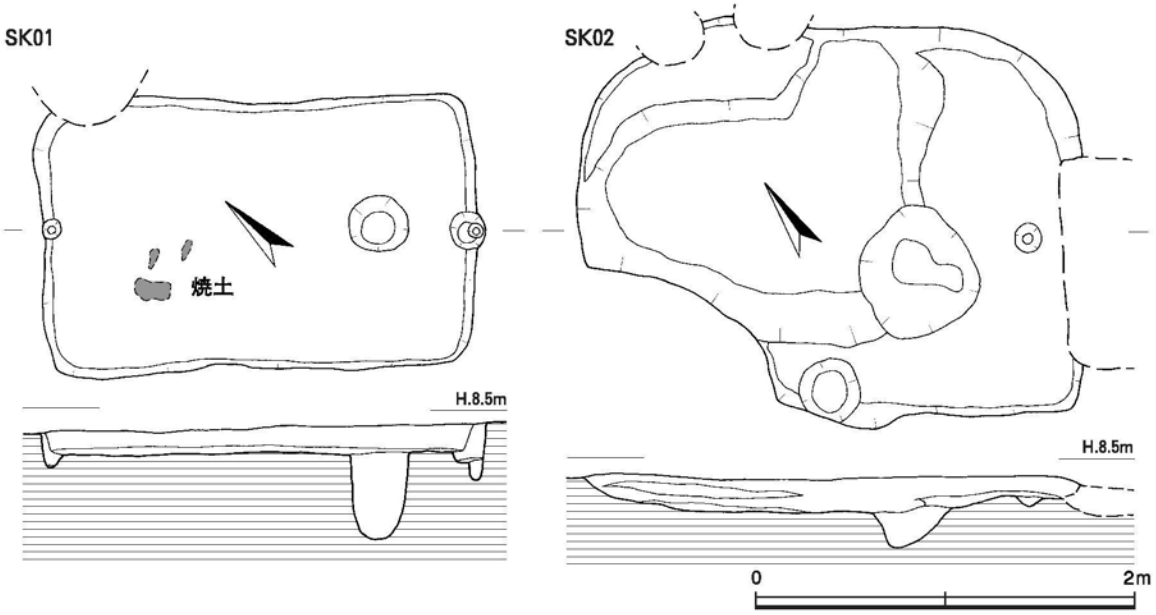


Fig. 17　SK01・02実測図（1/40）

4．遺構と遺物

①　土壙（SK）

SK01（Fig.17、PL.2-1）

調査区南側で検出した。主軸をN－44°－Wにとり、平面形は隅丸長方形である。長辺2.4m、短辺1.5m、床面までの深さは最大で15cmほどで遺存は悪い。床面はほぼ水平で、中軸線上には両端と中央やや南よりにピットが並ぶ。真ん中のピットは床面から45cm程の深さがある。中央やや西寄りでわずかに焼土が確認された。覆土は褐色土が主で、床面上5cm程は暗褐色土が斑状に混じる明褐色土である。真ん中のピット部分は暗褐色土で埋まる。遺物がほとんどなく、時期は不明である。西側の第114次調査でもほぼ同じ形の土坑が検出されており、弥生時代前期頃の長方形土坑と報告されている。

出土遺物　図化し得ない時期不明の土師器小片が1点出土した。

SK02（Fig.17、PL.2-2）

SK01の東側で検出した。隅丸長方形の一角が抉り取られたような形状を呈する。南端は攪乱により切られている。長軸2.65m、短軸2.12m。床面までの深さは約20cm、中央部の窪みは床面からさらに20cmの深さを測る。覆土は褐色土が主で、中央部の窪みは地山の明褐色土とよく似るが締まりがなくやわらかい。土師器と須恵器の小片が出土した。時期は古代であろうか。

出土遺物（Fig.18）　図化し得たのは須恵器の杯破片1点のみである。1は須恵器の高台付杯の小片で約1/8の残存である。小片のため不確実だが、高台部の復元径は7.6cmである。胎土は精良、焼成は良好である。

②　ピット出土遺物（Fig.18）

遺構検出面・ピットから土師器・須恵器が出土した。いずれも小片で器形を判別できるものはほとんどない。図化し得るものは1点だけである。2は須恵器の高台付杯の小片で、約1/5の残存である。SP05より出土した。復元高台部径は6.2cmである。摩滅が著しい。

5．まとめ

今回の調査地点は舌状台地の中央付近に位置し、周辺では弥生時代から古墳時代の住居址や掘立柱建物が検出されている。このことから当該時期の集落が検出できることを期待したが、遺構密度はうすく、削平も著しかった。西側の第114次、第152次地点の東半部でもほとんど遺構が検出されておらず、削平により多くが失われたものと思われる。検出した遺構の時期は、出土遺物が僅少で決定しがたいが、概ね古代であると推定される。

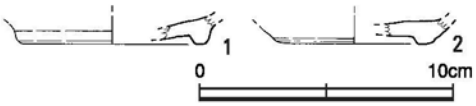
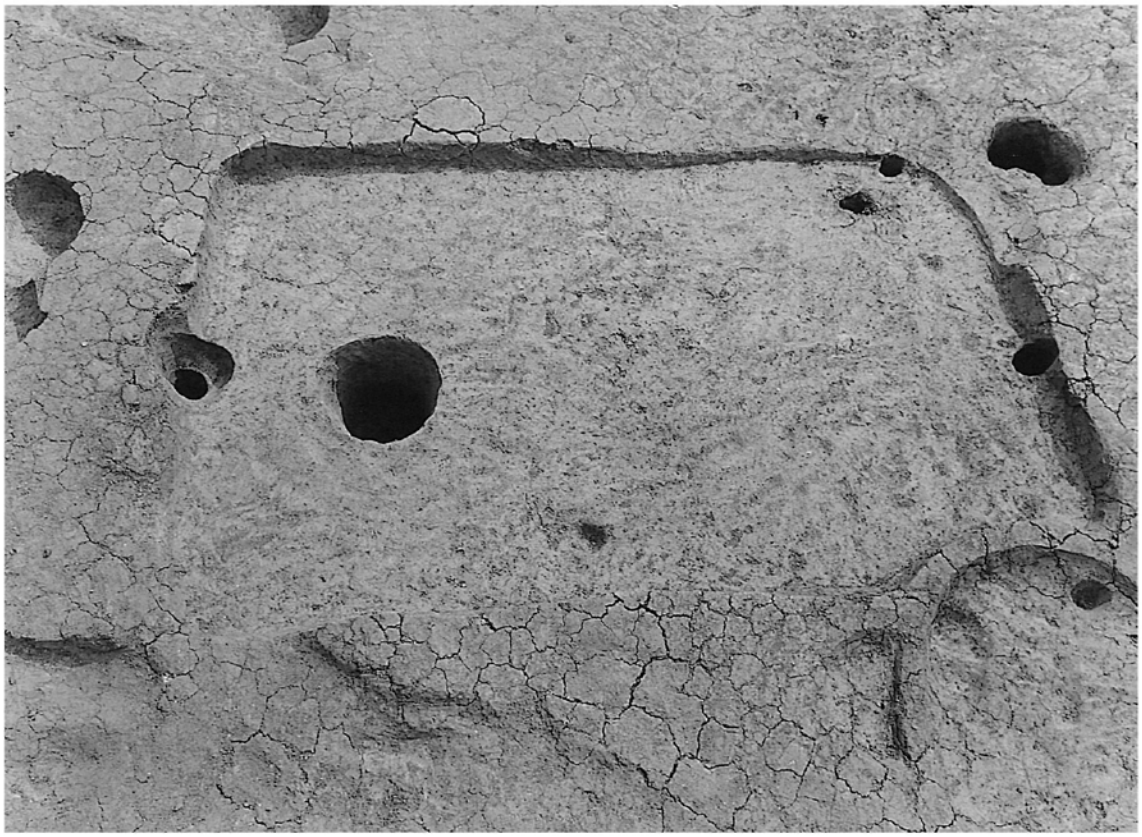


Fig. 18　224次調査出土遺物実測図（1/3）

1．調査区南側全景（南より）

2．調査区北側全景（南より）

PL. 2



1．SK01完掘状況（東より）

2．SK02完掘状況（東より）

第６章　第225次調査の記録

１．調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課（以下、埋文課）は、2006（平成18）年６月２日付で武居英輝氏から早良区有田１丁目33－７における個人専用住宅新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を受けた。埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群の推定範囲に含まれていることを確認し、工事予定地で平成18年６月７日に試掘調査を実施した。この試掘調査において遺構・遺物の存在が確認されたため、この成果を元に両者で協議を行ったところ、工事によって遺構の破壊を免れないため、地山切り下げ部分である駐車場およびエントランス部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、平成18年７月27日から発掘調査、遺構・遺物の内容から平成18年度中に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

２．調査体制

調査委託：武居英輝
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
調査総括：埋蔵文化財第２課　　課長　力武卓治
　　同課調査第１係長　　池崎譲二
調査庶務：文化財管理課　　後藤泰子
事前審査：埋蔵文化財第１課　　事前審査係長　濱石哲也
　　同係主任文化財主事　吉留秀敏
　　同係文化財主事　松浦一之介（前任）　上角智希（現任）
調査担当：埋蔵文化財第２課調査第１係　阿部泰之
調査作業：永井ゆり子　辻節子　古庄孝子　三谷朗子　松本順子　田原忠昭　神原堅
整理作業：窪田慧　黨早苗

３．調査概要

第225次調査区は現西福岡中学校の南にほぼ隣接する位置にある。ここは有田遺跡群が位置する洪積台地の中央部、谷の解析で台地が鞍部状に細くなる西側の谷頭付近である。調査地では現地表面から－50～55cmでローム質土が露出し、遺構はその上面で検出される。上述の谷頭は検出されず、谷の開析はロームの傾斜から調査区の東に伸びると推測される。

今回の調査では、竪穴住居３軒・ピットを検出した。遺構は主に調査区西側に分布し、遺構検出面は東に向かって標高を下げる。地山のロームは削平を受けており、遺構検出時には住居址の堀方の底面がうっすら見えている状況であった。遺物は土師器・須恵器がわずかに出土し、古墳時代後期の住居址と推測される。住居址以外のピットは平面形・底面ともに不整で壁面もはっきりせず、遺構の可能性は低いと思われる。遺物は、須恵器・土師器・弥生土器がコンテナケース１箱程度出土した。いずれも小片で、器形のわかるものは少ない。

削平が激しく遺構・遺物ともに少ないが、南に近接する141次・222次調査でも古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物が検出されており、これらの結果から調査地周辺に当該期の集落が広がっていたことが推測される。

Fig.19　225次調査区位置図（1/1,000）

4．遺構と遺物

①　竪穴住居（SC）

SC01（Fig.22）　調査区北部で検出した。SC02を切る。大部分が調査区外となるが、東側周壁が直線的に伸びることから平面プランは方形と推測される。東壁の検出長は1.4mで、北端が若干西に向け弧を描くので隅角部はこの付近か。深さ10cm前後で残りは悪い。

主柱穴は大部分が調査区外となるため不明だが、中央にピットを1基検出しており、柱痕跡はないが深さ30cmを測るしっかりした遺構なのでこれが主柱穴の一つとも推測される。壁溝は検出されなかった。貼り床は検出部についていえば明確には検出できなかった。掘り方の底面はほぼフラットである。竈は検出部からは検出できなかった。

出土遺物（Fig.23）　いずれも須恵器である。1は蓋の小片である。明瞭な稜を有しこの部分で13.6cmに復元される。2は坏身の小片である。外底面にカキメが観察される。このほかに土師器と推測される土器の小片が1点出土した。器形その他は不明である。

SC02（Fig.22）　調査区中央部西よりで検出した。SC01に切られる。4/3程度が調査区外となるが、東側周壁が直線的に伸びることから平面プランは隅丸方形と推測される。東壁の検出長は3.7mで、北端が若干西に向け弧を描くので北東の隅角部はこの付近か。深さ10cm未満で残りは悪く、床面まで削平を受けていると推測される。

主柱穴は大部分が調査区外となるため不明だが、SC01の近くにピットを1基検出しており、柱痕跡はないが深さ40cmを測るしっかりした遺構なのでこれが主柱穴の一つとも推測される。

壁溝は検出されなかった。貼り床は検出部についていえば底面全体に施される。ロームのブロック

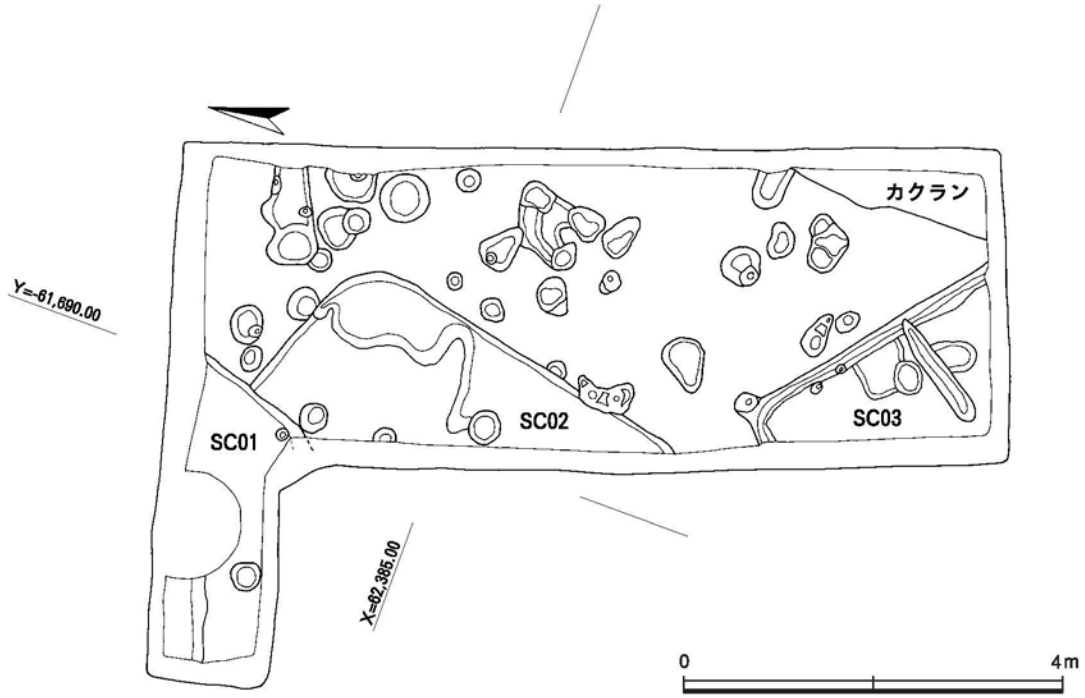


Fig. 20　調査区全体図（1/80）

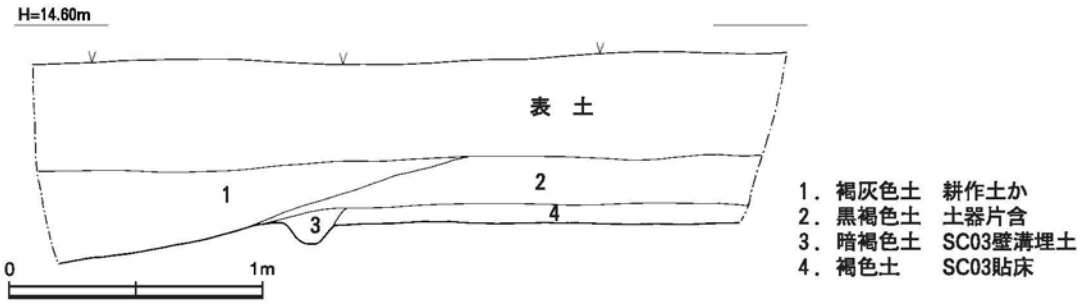


Fig. 21　調査区南壁土層断面実測図（1/30）

が多く混じった黒褐色土を用いる。掘り方は東側に5cm前後深くなるが、顕著な凹凸はない。竈は検出部からは検出できなかった。

遺物は、弥生土器・土師器の小片が出土したが、器形のわかるものはほとんどない。陶器の小片が１点あるが、表土からの混入と推測される。

SC03（Fig.22）　調査区南部西よりで検出した。東周壁から北東隅角部にかけての部分が検出され、平面プランは隅丸方形と推測される。北東隅角部にピット状のくぼみが検出されたが、SC03に切られるもので、SC03の１施設というわけではない。東壁の検出長は2.9mを測る。深さは5～15cmを測る。残りは悪く、床面まで削平を受けていると推測される。

主柱穴は大部分が調査区外となるため不明。中央付近に長さ1.3mを測る溝状遺構が検出されたが、SC03を切る遺構で、この住居址と直接の関係はないと考えられる。

壁溝は検出部についていえば周壁に沿って検出された。幅は10～25cm、深さ5～10cmを測る。東壁に沿う部分で径10～15cm、深さ10cm程度の小ピットが検出され、周壁沿いに張られた板材等を固定するための棒を立てたものとも推測される。貼り床は遺構検出時にすでに露出していたが、検出部

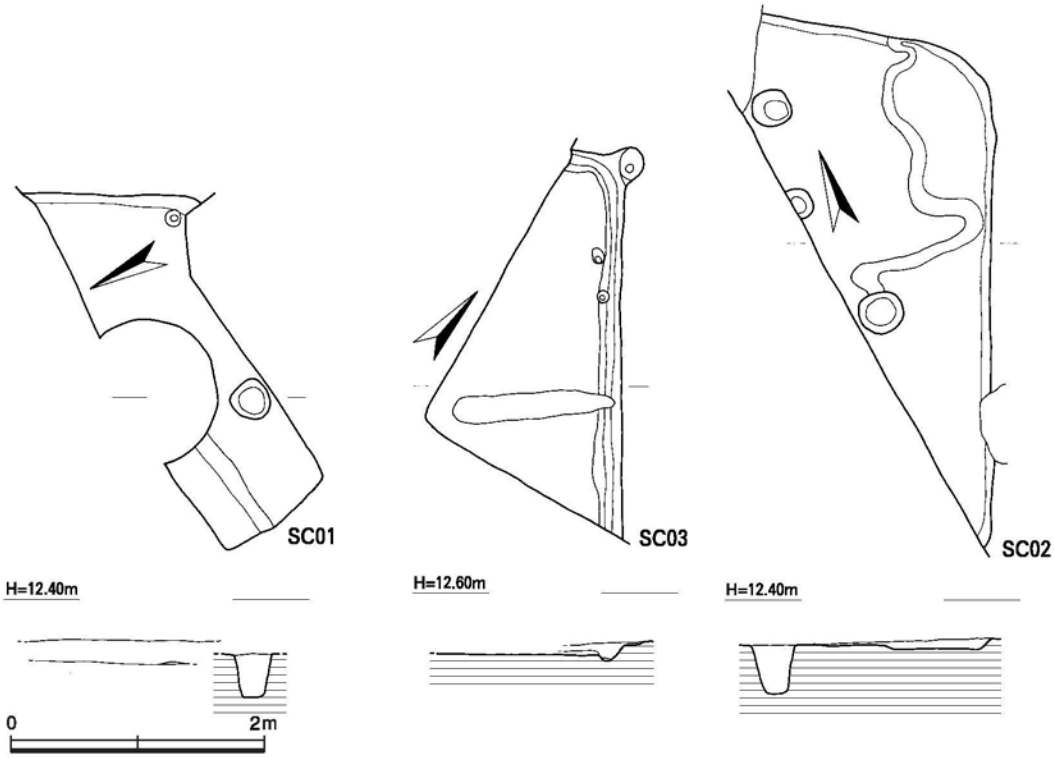


Fig.22　SC01・02・03実測図（1/60）

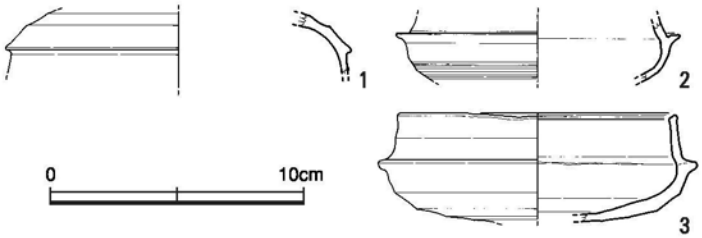


Fig.23　225次調査出土須恵器実測図（1/3）

についていえば底面全体に施される。ロームのブロックが多く混じった黒褐色土を用いる。掘り方の底面は概ねフラットである。竈は検出部からは検出できなかった。

出土遺物は、土師器と推測される土器の小片が１点出土した。器形その他は不明である。

②　その他の遺物

遺構検出面・ピット・撹乱の埋土から弥生土器・土師器・須恵器が出土した。いずれも小片で器形を判別しうるものはほとんどない。器形のわかる遺物をFig.23の３に図示する。

3は、須恵器坏身である。小片だがほぼ全体を復元できた。口径10.8cm、器高4.3cm以上に復元される。かえり部はほぼ直立し口唇部内面に段を有する。器形から推してSC01に帰属する遺物か。

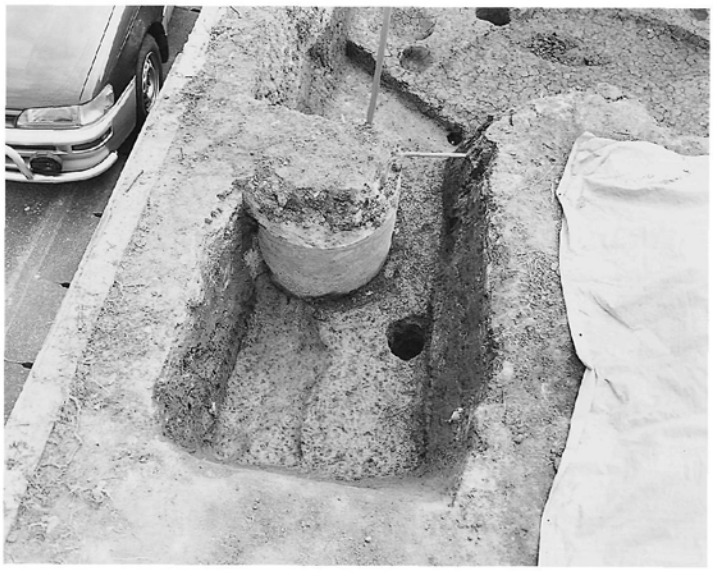
５．小結

今回の調査で検出した主な遺構は竪穴住居3軒である。ピットは遺構ではない可能性が大きい。削平が顕著で遺構の残存状況はよくないが、以下の状況が判明または推測される。

まず現在の西福岡中学校から南に入る谷は225次調査区にはかからないこと。遺構の内容として、５世紀末～６世紀初頭頃と推測されるSC01に切られる住居址があり遅くとも５世紀代から調査地周辺が居住域となっていた可能性が高い。これは先行する第141次調査の成果とも矛盾せず、有田遺跡群内の古墳時代を通じての集落の一部を検出したものといえよう。

1．作業状況（西より）

2．調査区全景（北より）



3．西側拡張区全景（西より）

PL. 2

1．SC01（西より）

2．SC02（東より）

3．SC03（東より）

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ
書名	有田・小田部
副書名	有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査報告
巻次	44
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第920集
編集者名	阿部泰之（第218・219・222・225次）・今井隆博（第224次）
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2007年（平成19年）3月30日
調査面積	95.8㎡（第218次調査）32.4㎡（第219次調査）38.1㎡（第222次調査） 98.53㎡（第224次調査）34.5㎡（第225次調査）
調査原因	個人住宅建設

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間
		市町村	遺跡番号			
ありたいせきぐん 有田遺跡群第218次	ふくおかけんふくおかしさわらく 福岡県福岡市早良区 ありた 有田1-12-7	40137	0309	33° 33′ 53″	130° 20′ 12″	2005.4.27～5.21
ありたいせきぐん 有田遺跡群第219次	ふくおかけんふくおかしさわらく 福岡県福岡市早良区 こたべ 小田部5-15-5	40137	0309	33° 34′ 10″	130° 19′ 49″	2005.5.24～6.3
ありたいせきぐん 有田遺跡群第222次	ふくおかけんふくおかしさわらく 福岡県福岡市早良区 ありた 有田1-33-15	40137	0309	33° 33′ 49″	130° 19′ 59″	2005.12.15～12.26
ありたいせきぐん 有田遺跡群第224次	ふくおかけんふくおかしさわらく 福岡県福岡市早良区 こたべ 小田部5-47-1・47-2	40137	0309	33° 34′ 08″	130° 19′ 55″	2006.5.26～6.22
ありたいせきぐん 有田遺跡群第225次	ふくおかけんふくおかしさわらく 福岡県福岡市早良区 ありた 有田1-33-7	40137	0309	33° 33′ 48″	130° 20′ 00″	2006.7.27～8.4

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ありたいせきぐん 有田遺跡群第218次	集落	古墳後期/古代	掘立柱建物１＋ 土壙３	須恵器＋ 弥生土器	
ありたいせきぐん 有田遺跡群第219次	集落	近代以降	溝１	瓦質土器＋ 陶磁器	戦後の水路跡
ありたいせきぐん 有田遺跡群第222次	集落	古墳後期	竪穴住居１	土師器＋ 須恵器	廃絶時の祭祀に 土師器を使用
ありたいせきぐん 有田遺跡群第224次	集落	古代？	土壙・ピット	土師器＋ 須恵器	
ありたいせきぐん 有田遺跡群第225次	集落	古墳後期	竪穴住居３	須恵器＋ 弥生土器	古墳時代後期の 竪穴住居址群

（各調査成果の要約は次頁）

要　　約	第218次調査では１×１間の掘立柱建物を検出した。長方形の土壙が検出されたが、布掘りの下部である可能性が考えられる。 第219次調査では有田遺跡群の北限の状況を検出した。 第222次調査では古墳時代後期の竪穴住居を検出した。構築過程が追える住居址で、廃絶時の祭祀に土師器を使用していると推測される。 第224次調査では土壙２基とピットを検出した。削平が著しく、遺構・遺物ともに少ないため詳細は不明である。 第225次調査では古墳時代後期の竪穴住居址群を検出した。近接する222次調査で検出された住居址と併せ当該期の集落の一部と推測される。

有田・小田部 44

－有田遺跡群第218・219・222・224・225次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第920集

2007年３月30日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　松古堂印刷株式会社
福岡県福岡市西区周船寺１-７-64
TEL 092-806-1661